



「七福神めぐりー茨城県版ー」(第 12 回)  
ー「大(だい)宝(ほう)八幡宮の七福神」と国指定史跡「大宝城址」ー

日本ウオーキング協会 専門講師 堀野 正勝

大宝八幡宮の七福神(大宝七福神)は、一ヶ所で七福神をお参りすることができます。大宝七福神は、茨城県下妻市大宝 667 に所在する大宝八幡宮の拝殿左側に在ります。

(大宝八幡宮)

大宝八幡宮は、白鳳時代の末期、文武天皇の大宝元(701)年、藤原時忠公が、常陸国河内郡へ下向の際、筑紫(大分県)の宇佐神宮(全国 4 万社余ある八幡さまの総本宮)を勧進(神仏の分霊を請じ迎えること)したのが始まりで、関東最古の八幡さまと言われています。

ご祭神は、<sup>ほんだ わけのみこと</sup>誉田別命(第十五代応神天皇、八幡大神様)、<sup>たらしなかつひこのみこと</sup>足仲彦命(第十四代仲哀天皇)、気長足姫命(第十四代仲哀天皇の皇后、神功皇后)の三柱の神様です。八幡大神様は、その御代に治山治水・学問・漁獵・商工・土木建築・交通運搬・縫製・紡績・その他あらゆる殖産興業の途や、衣食住等生活の根源を開発指導された文化の生みの親神様であると同時に、武の道を司る神としても世に名高く、まさに一切生業の守護神です(大宝八幡宮しおりより)。

文治五(1189)年、奥州征伐平定の日、源頼朝公が鎌倉の鶴岡八幡宮若宮を勧進し、摂社若宮八幡宮(若宮様は第十六代仁徳天皇)を創建しました。

従って、大宝八幡宮には、十四代仲哀天皇(本殿)、十五代応神天皇(本殿)、十六代仁徳天皇(若宮)の親、子、孫の三代がお祭りされています。

当宮から勧進された八幡神社は数えきれませんが、我々と縁の深い、伊能忠敬像の建つ、東京深川の富岡八幡宮がその一つとして著名です。

大宝という年号は、この年の三月、対馬で初めて国産の金が産出し朝廷に献上され「大きな宝を手に入れた」と喜ばれ慶事により改元されたと伝わっています。大宝八幡宮の財運招福、特に近年見られる宝くじの当選祈願によるご利益の発揚は、社名に恥じないとか。

天台宗の古い経文の奥書に「治承三(1179)年七月二十二日書了於常陸州下津間八幡宮書了兼智」とあり、平安末期には既にこの地で「八幡信仰」が盛んに行われていたことが伺われます。平将門公も度々戦勝祈願に訪れ、当宮の巫女によって新皇の位を授かったと伝えられます(将門紀)。

(大宝七福神)

大宝七福神のご利益は、寿老人(長寿・平和)、布袋尊(忍耐・幸運)、恵比寿(商売繁盛)、毘沙門天(勇気・退魔)、弁財天(学問・芸術)、福祿寿(長命・幸運)、大黒天(金運・財運)となっています。

(大宝八幡宮の境内は国指定の史跡)

平安から南北朝時代にあった大宝城は、大宝沼に囲まれた三方断崖の要害の地でした(明治四十年測図 5 万分 1 地形図参照)。

旧大宝城は、西、北、及び東方の一部を旧大宝沼に囲まれた台地の自然地形を利用して増築された城郭で、三方断崖に面した要害の地でした。城は東西約 300m、南北約 600m で、台地の北方を本丸、南方を大手、東を搦め手としました。城は、康永二(1343)年の落城(城主下妻政泰討死)まで、南朝方の拠点となっていました。城址は、大宝八幡宮の境内として今にその面影を残しています。

明治初めの神仏分離以前には、境内には 8 つの寺院があり、今も祖霊殿(神道式納骨堂)や鐘楼(鐘つき堂)、隋神門(神域に邪悪なものが入らないように神を祀る門、例えば仁王門)など神仏習合の名残が伺えます。



大宝八幡宮拝殿



大宝七福神



大宝八幡宮三の鳥居  
(大宝城大手門付近)



大宝八幡宮隋神門

